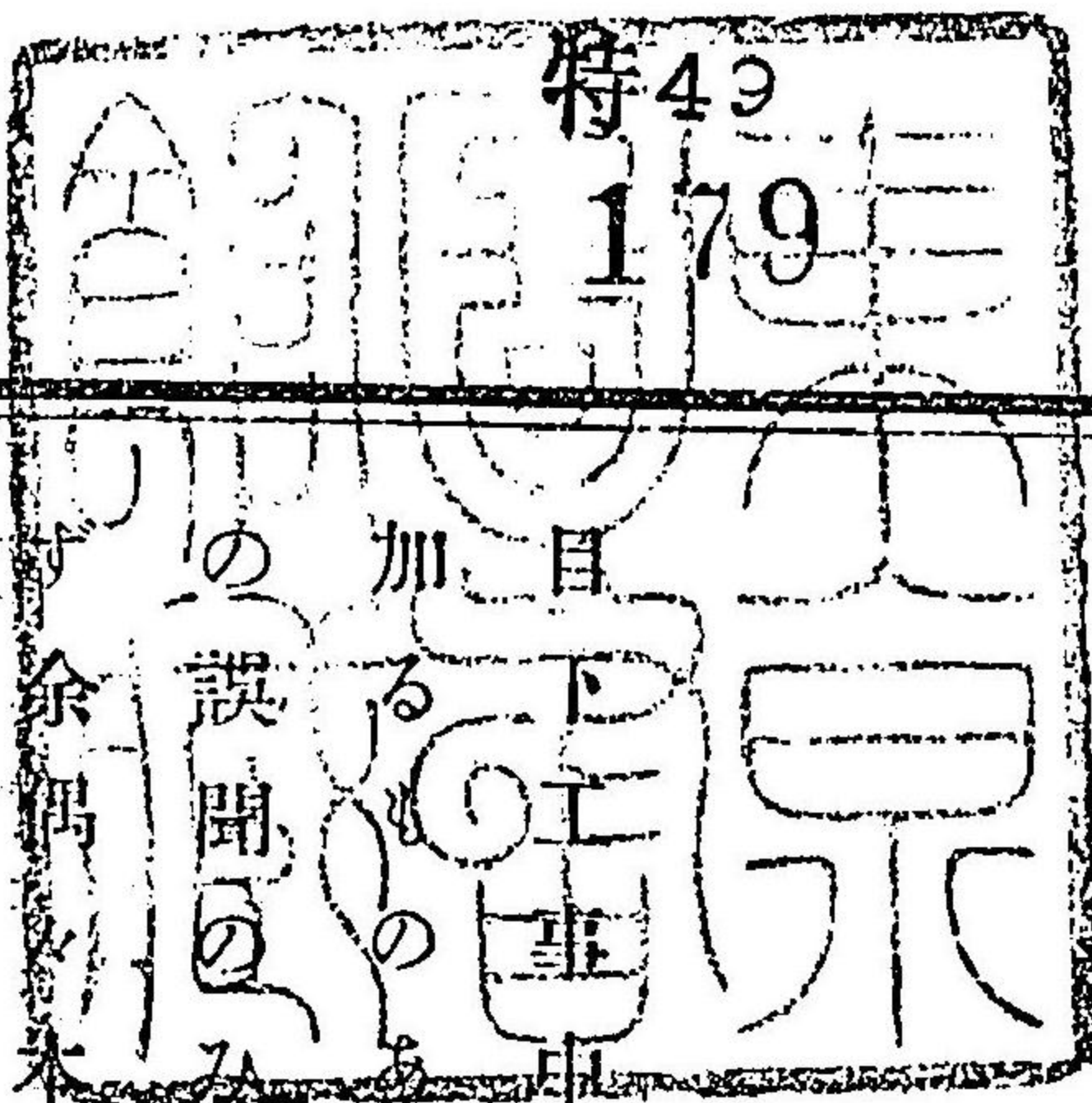


A-60



北越鐵道工事實見

附運輸交通の現況



北越鐵道工事實見

明治二十九年の冬新
潟往復の途上に於て

甲 秀輔記



なる北越鐵道の狀況に就ては世間兎角の評を
加ふるものもあるも之れ皆な坐上の憶説にあらざれば人傳て
の誤聞のみ未だ嘗て其實狀眞味を穿ちたるものあるを見
す余偶々本鐵道會社の技師長として工事總監督の任を負
擔せる本間英一郎氏に隨ひ親しく其線路を履み將た工場
に臨み即ち實地工事の經過及其現況を目撃するの好機に
會したれば次を逐ふて此に其の顛末を報道すべし蓋し其

の本文に入るに先立ち世人に向て本線路の起點終點及其の經過地の那邊に在るかを紹介し以て全篇通讀の參照に資す

線路の起終點

起點は越後國中頸城郡直江津港にして終點は一は新潟市に至り一は北蒲原郡新發田に至る

線路經過地

同國中頸城郡直江津より海濱に沿ふて刈羽郡に入り柏崎より右折して三島郡の南部澁海川の流に隨ひ又た浦村方面に轉じ信濃川の中流を渡りて古志郡に進み長岡町を経て南蒲原郡に達し三條加茂等を過ぎて中蒲原郡に入り新津町に至りて一は分岐して新潟市に達し一は直行して北

蒲原郡に入り水原を経て新發田に至る其線路哩數延長百〇二哩餘

工事着手

本鐵道は昨明治二十八年十二月十二日を以て本免狀下附の命に接し直ちに其の用地に充つべき地區の檢定に従事し同十二月より本年二月まで積雪寒風骨を刺すの艱苦を凌ぎ以て該用地杭の樹立を了り同年三月を以て一面には土地買收の談判を開き一面には工事の設計材料の蒐集等に着手し拮据精勵斯事に勉むる所ありしも不幸土地買收の一事は圓滑示談の局を結ぶ能はず一時之を中絶するの止を得ざるに至りたり但し工事の設計既に成り其請負者又確定して人夫の募集を始めたる以上は荏苒日子を消過

四
する能はず仍て臨機土地使用の認諾を求め地價の協定を
後にする事に決し即ち地方人民に交渉して之が談判を試
みたりしに固より公共の利益を計り地方の便宜を進むる
土臺たれば或る方面に據りては敢て一人の異議苦情を挾
むものなく殆ど雙手を舉げて賛成の意を表するに至りた
り仍て本年五月上旬を以て諸器械を徴し人夫を集め先づ
本線路中唯一の難工事と目せられたる彼の米山の北麓鉢
崎、青海川間に列なる隧道開掘の土工を起したりと之れ余
が今回の巡見中最も艱難を嘗め辛苦を喫したるの工區な
れば茲に其の概況の一斑を掲記すべし

米山の隧道

米山は越後國中頸城と同刈羽との兩郡界に屹立する一大

高山たり東は城ノ越、尾神、兜巾等の高嶺に列なり北は滄々
たる海に面す昔上杉謙信と長尾晴景と兵を交へ雌雄を決
したる有名な古戦場なり巉巖危立、峻岬突出、怒濤千仞の絶
壁を嚙む其狀一見戰栗するに足る此の一事を以てするも
其工事の難易は略々推知するを得べし隧道は第一號より
第八號に至るの八個にして彼此四五町乃至七八町を距て
東西に駢列す其大小各個の距離を舉れば

第一號隧道	六百十九尺
第二號同	二百六十尺
第三號同	千四百五十八尺
第四號同	八百十九尺
第五號同	四百六十六尺

第六號同 六百四十尺九分
 第七號同 千六十二尺九分
 第八號同 千三百九十七尺九分
 にして合計六千七百廿三尺七分とす、
 余は一行に陪して第一號隧道より順次觀察を始めたなり但
 し第一號は全く其工を竣り第二號又た工を進むる既に十
 中の八九故に這は其の洞通掘鑿の偉大なると煉瓦累積の
 美麗なるを稱賛し快然濶歩し去りて第三號に移りたり
 此の隧道は工事未だ央にして洞中暗黒陰氣慘澹其の物凄
 さ言はん方なし各々手にく燭を携へ歩を進むること須
 臾、忽ち頭上の巖壁滴瀝の聲を發し濁水混々頭を打ち背を
 襲ふ加之洞裏凹凸又た曲折、僅に丸木の梯子(一本の丸木に

齒形を刻し若くはカスガヒを打ちて足止めを作りたるも
 のを攀ぢ匍匐尺餘の岩孔を潜れば又二三步にして危岩怪
 峭の間を涉り幅掌大の板橋を履で長大の暗渠を渉るなど
 余の如きは此の少間經過の中に於てすら氣息喘々動もす
 れば眩暈を發せんとするの思ひあり然るに燭を翳して左
 右岩頭の下を窺へば被髮垢面敝衣赤脚不動の如き鍾馗の
 如き將た羅漢の如き輩或は鐵槌を揮ふて岩角を碎くあり
 或は鍬を操て砂礫を穿つあり其他土車を押すあり水を排
 するあり轉帳反側而も之れ穴中暗黒の行動所謂百鬼夜行
 の有様を目前に見るの心地悽絶愴絶得て其境界を名狀す
 る能はず其勞實に察すべきなり、余は此の難關を僅に出で
 未だ額上の冷汗を拂ふの遑だになきに又た第四號に導か

るゝことゝはなりぬ蓋し思へらく既に此の如き非常の危
道を踏み難關を超えたれば後は左までの困難を見ず大概
容易に通過するを得べしと然るに實際其の洞中に臨むや
余が希望は全く水泡に歸し第六號及第七號の間に於て殆
んど同様の艱苦を嘗め殊に其の最後に列する第八號の最
長隧道即ち一千三百九十七尺餘の間に於ては前記第三號
に勝るも劣らざる程の一大苦楚を喫したり其の狀況は大
同小異なれば再び此に喩々するの要なしと雖も時既に七
個の隧道を潜り數十町の海濱を走りたれば余が身體は綿
の如くに疲れ咽乾き胸悸きて行歩自在ならず實に殘念に
堪へざるも亦た如何ともする能はず殊に此の際最も羨し
く思ひたるは諸氏の體軀にして亦た最もうらめしく思ひ

たるは余の體軀なりき即ち本間技師長を始め其他の人々
は孰れも輕軀敏捷にして巖頭を傳ひ嶮路を走る恰も猿猴
の梢を渉る如き妙ありと雖も余は原來肉肥へたるが上
に腹便々常に小布袋を以て目せらるゝ如き不細工の人物
故に如何に氣を焦ち心を勵して後れざらんを欲するも得
ず土塊に躓きては右に倒れ石片に觸れては左に轉び其の
都度手には泥を掴み膝には赭土を印し恰も爐灰の中に投
じたる團子其儘といふ容體にて漸く洞中を這ひ出たるそ
きは我れながらをざましくも又たうら悲しく思はず數行
の悔し涙を翻したるが可笑し兎に角本隧道工事の巡見は
余が身に取っては征清從軍以來實に第二の困難たりしこ
とは確かに鼓大の印章を捺して保證するを辭せざる所な

工事長足の進歩

殊に本鐵道の上に就き此に特筆して世上に吹聴すべきものあり并は他にあらざ右米山海岸八個の隧道は幸ひに其地質之を掘鑿するの宜しきに適し着手以來敢て工事の進行を阻碍するものなく日夜驟々其歩を進め即ち延長六千七百廿三尺餘に亘る巖石を僅に百四十日間の少日數中に於て物の見事に開鑿し了りたるを之れなり而も其一日に穿ち得たる平均尺數を索むれば四十八尺餘の多きに居る實に長足の進歩と謂はざるべからず此の勢ひにて推進する時は本隧道全體の工を竣るは蓋し來春一月を出ざるべしといへば其の直江津より柏崎に至る二十四哩の間に瀛

車の運轉を見るも敢て遠きにあらざるべし

海岸防浪工事

米山の北麓に列なる大小八個の隧道は前記の如く孰れも海岸に瀕し狂瀾怒濤常に其の岸頭を撃ち動もすれば破毀崩壞の害を加へんとするの危険あるに由り此の間七哩内外の距離に對しては勢ひ海岸波除石垣を築き以て線路の安全を保たざるべからず是又一個の難工事に屬するもの殊に起工以來天候順を失し豪雨暴風の災交もく至り其都度折角成らんとする石垣を崩し堤防を破り屢々不測の損害を興へたりと今此の區間工事擔任の技師たる井上清介氏に就き親しく聞き得たる談話の要領を左に掲げ以て其事實を詳にすべし

米山海岸の波除石垣工事は堅良なる石材を同山中に求めセメントモータ積又は間知積等の方法を取り最も鞏固堅確に築造するの目的にて同山各所の石山より數種の石材標本を徴したりしに不幸其の外觀と實物とは大に品質を異にし悉く不良軟弱にして一も浪除工事の用に適するものなし此に於て俄に最初の設計を變更し右等不良の石材を以て先づ假石垣を築造し或は數多の木杵を造り其の内に充ずる海岸に散在せる轉石を以てし兎角波濤の防禦を勉め偏に其軌鐵の敷設を急にせり之全く該線路を既成官設線に接續し(直江津にて)遠く關山邊に於て良質堅硬の石材を得之を瀛車便に依りて運搬し、右假設石垣の外部に繞らずに尙ほ此の良石材にて築

きたる石垣を以てせんとするの目的に在り左れば最初築積の假石垣は一見恰も徒爾益無の觀なき能はずと雖も其實決して然らず此等の石垣は本石垣の裏詰又は捨石に供するの要あるを以て其の工事全體の經濟上よりするも兎に角之に據りて隄防の築造軌道の敷設を速にし各土工運搬の便に供したるは實に間接的の利益として稱せざるべからず但し假設石垣の成立は右の如き有様なれば固より其の牢固完實を望むべきものに非ず然れども幸ひに其工を竣りたる部分は彼の十一月四日以來の暴風怒濤に遭ふも些も破壊の跡を認めず只其の工事共に屬し漸く五六尺許り積立たるものは丈餘の激波に其上部を掠められ裏面の詰石を奪はれたる爲め遂に

石垣全部を破壊するに至りたりと但し這は成な未だ完成に至らざるものとみ其の全部累積の工を了りたるものは儼として一も動くなし况や更に良石材を徴して其外部を抱圍し以て其の保障を鞏固ならしむるに於てをや要するに是等の怒濤狂瀾を能く防止し其の工事を完成するには豫て數多の石材を準備し天候平穩の期に乗じ一齊之を十尺以上に築造するに在り左すれば如何に猛烈の怒濤を喫するも決して破壊流失等の損害を生ずる事なし現時即ち此の方法を採て工事に隨ひ大に好結果を奏しつゝあり願ふに今日或る一派の徒が鬼の首にても取りしかの如く右未成石垣の小破壊を奇貨とし大聲疾呼其地方デモ新聞杯を利用して以て非難攻撃に齷

齷せるの状實に憫笑に堪へざるものあり蓋し之れ爲めにする所ありて然るや否、深夜人定りて四顧寂寥燈火明滅影暗澹虚心平氣に復へるの時彼等が良心は憤然として蹶起し必ずや彼等が面に唾して其奸曲を責め反省を促し去らんのみ阿々

兎に角米山一帶の工事は實に容易のものに非ず隧道及浪除の大土工に亞ぐに尙ほ各所切取の難工事を以てす之れ成な隧道の身代りとして開掘せしものなれば或は數十尺の山頂を眞向より梨子割りに切開きたるあり或は數十丈の山脈を片端より一文字に切裂きたるあり其他丘阜岡陵の掘鑿開截は幾何なるや枚擧に遑あらず其の勞力の多くして又た困難なりし事は左右の巖壁に點々波狀を爲し一

十六
鍬毎に現はれたる痕跡に徴して知るを得べきなり尤も中には其切取りの勾配稍々急に過ぎ永遠の計に適すべきや否を疑ふものなきに非ずと雖も何にせよ僅々百四十餘日の間に於て既に此の大土工の八九分方を竣り來春一月を俟て其の軌道を柏崎に達せしめんとす監督者の精勵工夫の勞苦相共に多とすべきなり

直江津鉢崎間の工事

又た繼て其起點地たる直江津鉢崎間工事の現況を観るに此の間は地勢概ね平坦にして進工甚だ容易唯だ直江津の東側に横はる荒川の流れに一個の橋梁工事を施すに過ぎるのみ故に起工以來去る十月末までに其工を進むる十中の八九即ち直江津より柿崎を経て鉢崎に至る十六間哩餘

の間は既に全く軌道の敷設を了り汽車客車等の準備さへ成れば何時にても開業するに差支へなしといふ又た土地買収談の如きも彼我の氣合漸次好況に向ひ直江津鉢崎間及青海川柏崎間等は孰れも七月下旬より若干の買収を済し隨て各橋梁コルベルト等の工事に着手し逐日進歩の中に在り

線路經過地及非經過地の狀況

本鐵道經過地の一端は既に前述の如くなるが尙ほ其沿道市郡及各村等の概況を記し以て本鐵道が越後全國一市十五郡の土壤に對し如何なる部分に其地位を占めつゝあるか將た其運輸交通上に如何なる影響を與ふるかを觀察せん

本鐵道線路は越後國中頸城、刈羽、三島、古志、南蒲原、中蒲原、北蒲原及新潟市の一市七郡に跨り人口の衆、物産の豊及名區大邑等悉く其線路中に網羅し實に適切好良の地位に當りたれば其工を竣へ業を開くの曉に達せん乎其利する所少々ならざるべし由來新潟縣は其の面積人口の多大なる本邦三府一廳四十三縣中第一位を占め即ち面積は千二百八十方里の廣きに亘り佐渡の面積五十六方里三分三厘は此の以外とす人口は百六十一萬三千二百八十五を有す佐渡の人口十一萬二千三百三十餘は此の以外とす此の内本鐵道線路の經過地と非經過地とに屬する各市郡の面積、人口其他の要點を擧れば左の如し

新潟市 面積六分にして戸數一萬三百八十五、人口五萬

四百八十人を有す兎に角本邦五港の一に居る北越の一都會なるを以て商業工藝共に自ら繁盛を極め産物は塗物、箆、筥、蠟、履物及鮭魚等を最とす

北蒲原郡 は三町七十三ヶ村より成り面積百十一方里六分にして人口十九萬三千四百廿六を有す、新發田町(線路終點)は郡の中央に位し新潟市を東に距る七里餘の地に在り戸數二千七百餘戸古志郡長岡町に亞ぐ大邑なり産物は茶、石炭、石油、繭糸等を最とす

中蒲原郡 は面積九十六方里五分にして七町五十九ヶ村より成り人口十七萬四千二百零三を有す、郡中新津、村松及沼垂等孰れも一個の名邑にして産物は世に名を知られたる五泉平、茶、白根、小須戸、木綿縞等最とす

南蒲原郡 は面積七十方里にして四町四十八ヶ村三組合より成り人口十一萬六千八百三十一を有す三條、加茂、見付等孰れも郡中の名邑なり産物は形付木綿、金物類、縞木綿、金引苧、紙、元結等を最とす

古志郡 は面積四十五方里六分にして六町四十五ヶ村より成り人口十一萬三千九百八十三を有す郡中長岡町は中頸城郡高田町に次ぐ都會にして戸數三千三百五十五あり新潟市に通ずる汽船の咽喉にして商業又た盛大なり産物は椽尾紬、海絹及二子縞等を最とし生糸、金引苧、石油等之に亞ぐ

三島郡 は面積三十六方里四分四町三十九ヶ村より成り人口九萬九千九百九十九を有す郡中與板は信濃川に臨み

汽船の來往に便あり其戸數凡五百四十八、郡中の産物は銅、切石、石油、刻烟草、泡盛酒等を最とす

刈羽郡 は面積四十方里六分にして四町六十三ヶ村より成り人口十一萬六千六百七十四を有す郡中柏崎は著名の名區にして戸數一千六百五十一あり海濱に位置するを以て船舶の來往繁く商業又た盛なり

中頸城郡 は面積百九方里五分にして二町七十五ヶ村より成り人口廿萬零七千五百七十五を有す頸城三郡第一の平野にして農産物最も饒かなり、直江津(起點地)は荒川の河口に臨み海面に瀕するを以て出入の船舶多く市街又た年に月に繁盛を加ふるの好況あり柿崎鉢崎又た之に次ぐの名邑たり産物は石油、煙草、澱粉、水飴等を最とし生糸の産出

又た漸次多きを加ふるものゝ如し
以上は本鐵道線路經過地の各郡村に屬する一斑の概況なり
以下線路非經過地に屬する都合八郡の面積人口等を記し
し彼此比較参照の便に供すべし

西蒲原郡	面積四十六方里六分、三町七十ヶ村人口十四萬六千七百九十二
西頸城郡	面積八十二方里、三町三十四ヶ村人口六萬四千四百五十九
東頸城郡	面積廿一方里五分、廿九ヶ村人口五萬四千四百十七
中魚沼郡	面積六十八方里、三十五ヶ村人口六萬九千六百廿三

南魚沼郡	面積百五十二方里三分、三十七ヶ村二組合、人口五萬三千三百十八
北魚沼郡	面積百五十二方里三分、一町三十ヶ村一組合、人口六萬四千九百七十三
東蒲原郡	面積四十方里九分八厘、一町十一ヶ村人口一萬六千八百四十四
岩船郡	面積二百〇五方里五分、四町三十五ヶ村人口六萬五千三百七十八

本鐵道線路經過地と非經過地とに於ける全國一市十五郡に對する面積の廣狹、町村及人口の多少等は既に上述の如くなるも尙ほ左に雙方全部の比較表を掲げて一見諒悉の便に供す

線路經過地一市七郡

面積	五二一 ^{方里}
人口	一〇七七、五九二 ^人
町村數	三四 ^町
	四九〇 ^村

同非經過地八郡

面積	七八五 ^{方里}
人口	五三七、七〇三 ^人
町村數	一一 ^町
	二八一 ^村

右の如く其面積に於ては線路經過地一市七郡の非經過地八郡より狭き事二百七十四方里なりと雖も其の人口に於ては全く之と反對の地位に在り即ち線路經過地の非經過地より多きを五十四萬千八百九十九人にして實に一倍以上の多きに居る尙ほ試に之を其面積に對比し一方里に就ての人口を索むれば左の如し

線路經過地一方里に付 人口二千百〇八人餘
 同非經過地同 六百八十二人餘

即ち線路經過地人口の非經過地人口より超過すると千四百廿六人餘にして現に四倍以上の多きに居る夫れ面積の廣大にして人口の寡少なるは所謂開明進歩の反、此の一事を以てするも彼我農商工業の繁閑孰れに在る乎將た本鐵道が如何に要衝の地に横はりつゝあるかは嗚々を要せずして知るを得べきなり尙ほ左に彼此の面積及人口の割合を圖して參觀の便に供す

人口比較

線路經過地	面積	人口	町村數	同非經過地	面積	人口	町村數
	五二一	一〇七七、五九二	三四		七八五	五三七、七〇三	一一
			四九〇				二八一

本鐵道線路の延長

尙ほ聞く所に據れば本鐵道工事の竣るを俟ちて直ちに支線工事を起し即ち新潟市より西蒲原郡に入り同郡の中腹即ち曾根、吉田、島崎等を経て尼瀬海岸に出で夫より椎谷、荒濱を過ぎて柏崎に至り本線路と連絡せしむるの結構なりと云へば其面積四十六方里六分及び人口十四萬六千七百九十二は遂に又本線路經過地の區域中に編入せられ結局其の總人口百廿二萬四千三百八十四の大多數を抱持し隨て運輸交通の便益を擴大ならしむるに至るべし

總線路の竣工期

尙ほ翻て本鐵道線路百二哩餘に對する竣工豫定期を各工區に分つ時は概ね左の如し

- 第一區 直江津柏崎間凡廿三哩餘
- 第二區 柏崎長岡間凡廿三哩
- 第三區 長岡沼垂間凡四十哩
- 第四區 新津新發田間凡十七哩

右の内本年中に其成工を期し専ら董督に力らを盡したるものは第一直江津、柏崎間、第三長岡、沼垂間の兩區にして第一區は前報の如く其工を竣るもの既に十中の八九に達したるを以て遅くも來春一月中には成功を奏するに至るべき乎其の豫期の日子を經過し本年内に工を收むる能はざりしは起工以來天候の不順なりしと冬季風濤の害多々なりしとに由り彼の米山海岸一帶の築堤工事兎角意の如く工を進むる能はざりしに因るものならん由來越海風濤の

程に在りと云へば詰り第一區よりは尙ほ幾分か其成功を見るに遅からん

本年中に竣工を期したる第一區第三區の状況は既に前述の如くなるが其の第二區則ち柏崎長岡間凡そ廿三哩の工事は明年秋季を以て竣工の豫定なりとす此の區間土工を施すべきもの殊に多く就中隧道の巨大なるものは三島郡塚の山に開掘すべきものにして延長凡そ三千七百餘呎現今數百の工夫力を此の一方に蒐めて晝夜掘鑿に役々たるも着手日尙ほ淺きを以て其工を進むる未だ十中の二三に過ぎるも一體の進行甚だ宜しといふ次は信濃川の中流に架設し長岡町に達せしむべき一大橋梁にして其延長千二百餘呎尙ほ此他切取り及小隧道三個所も又た已に工を起

し日夜進捗の中に在り右信濃川橋梁工事は今冬季涸水の機に投じ橋臺橋脚の基礎を沈下するの計畫にて目下其準備に汲々たり第四區則ち新津新發田間凡そ十七哩の線路は來春を俟て工を起し來る三十一年を以て竣工せしむるの豫定にて目下彼此規畫設計中に在り兎に角本鐵道は其最先に直江津柏崎間及新潟長岡間の兩所に開業し一は官線と連絡して建築用材其他必要品運搬の便を開き一は未だ瀛車の何ものたるを知らざる北越人をして疾に其便宜に據らしめ以て其利益の廣大なるを知らしめんとするにあるものゝ如し

停車場豫定

停車場の位置を定むるの困難なるは蓋し土地買収の困難

激烈なるは常に吾人の耳にする所然れども眼親しく其物を視、躬親しく其境に接したるは今回を以て始めとす余が本間氏に跟随して米山の嶮路を踰たるは十二月十五日の事にして此の日や天氣穩順當地方の冬日和としては珍らしき程静かなりしも偶々山の一角に至り顧て海上の有様を望めば小山の搖ぐが如く白雲の群るが如き大波小浪屹立し來りて岸壁を撃ち、碎けて巨聲を發するの狀一見凄然毛髮自ら悚立す斯く靜穩の日に於てすら既に此の如し尙し風雨激甚の日に際せば其海荒れ浪高くして岸頭を襲ふの猛力尙ほ數倍なる事推知すべきなり此の如き多難多艱の海濱に在りて築堤及防浪の工事に努む争でか意の如く其工を進むるを得ん、石垣積設の遲緩を難じて賽の河原

的の工事を爲す抔評するものあるも這は其の實際の事情を知らざるもの言なり要するに北越海岸の鐵道工事は其實地の狀景を目撃するに非ざれば妄りに精粗巧拙の評を下すべきものに非ず、假令其目親しく工區の情況を視ざるも一夜直江津の旅亭に泊し枕に響く北海の怒濤風聲を耳にせば蓋し思ひ半に過るものあらん

第三區は沼垂(新潟市の東側)方面より起工し漸次古志郡長岡町に向ひ其歩を進めつゝあり此の間土地買収及其他の設計上地方人民との協議兎角圓滑の運びに至らず目下の工程は先づ全部の五六分方ならん此の區間は本年八月中未曾有の水害に罹りたるを以て工事の進捗に一大障礙を來し遂に豫定期内に其功を奏する能はず斯く五六分の工

程に在りと云へば詰り第一區よりは尙ほ幾分か其成功を見るに遅からん

本年中に竣工を期したる第一區第三區の状況は既に前述の如くなるが其の第二區則ち柏崎長岡間凡そ廿三哩の工事は明年秋季を以て竣工の豫定なりとす此の區間土工を施すべきもの殊に多く就中隧道の巨大なるものは三島郡塚の山に開掘すべきものにして延長凡り三千七百餘呎現今數百の工夫力を此の一方に蒐めて晝夜掘鑿に役々たるも着手日尙ほ淺きを以て其工を進むる未だ十中の二三に過ぎるも一體の進行甚だ宜しといふ次は信濃川の中流に架設し長岡町に達せしむべき一大橋梁にして其延長千二百餘呎尙ほ此他切取り及小隧道三個所も又た已に工を起

し日夜進捗の中に在り右信濃川橋梁工事は今冬季涸水の機に投じ橋臺橋脚の基礎を沈下するの計畫にて目下其準備に汲々たり第四區則ち新津新發田間凡そ十七哩の線路は來春を俟て工を起し來る三十一年を以て竣工せしむるの豫定にて目下彼此規畫設計中に在り兎に角本鐵道は其最先に直江津柏崎間及新潟長岡間の兩所に開業し一は官線と連絡して建築用材其他必要品運搬の便を開き一は未だ流車の何ものたるを知らざる北越人をして疾に其便宜に據らしめ以て其利益の廣大なるを知らしめんとするにあるものゝ如し

停車場豫定

停車場の位置を定むるの困難なるは蓋し土地買收の困難

に勝るものあらん所謂我田引鐵の論到る所に勃興し甲は
 産物饒多を主唱して之れを迎へんことを謀り乙は商業の
 繁盛を主張して之れを招かんことを努め互に相競ひて勝
 を制せんとす此の衝路に當る企業者の煩累察すべきなり
 本鐵道の如き又た紛争の渦中に屬し遂に東西何れの方に
 團扇の揚がるべきや今尙ほ交渉中にありと但し本線路及
 ひ延長線路に對する停車場の豫定地は凡そ左の如くなり
 と聞く

本線路停車場

- 中頸城郡 直江津港、犀瀉村、瀉町、柿崎、鉢崎
- 刈羽郡 柏崎町、北條村
- 三島郡 塚ノ山村、來迎寺村

- 古志郡 宮内村、長岡町
- 南蒲原郡 見附町、帶織、三條町、一ノ木戸村、加茂町
- 中蒲原郡 矢代田村、新津町、龜田町、沼垂町
- 北蒲原郡 水原町、新發田町
- 延長線停車場
- 西蒲原郡 内野村、曾根村、卷村、吉田村、地藏堂町
- 三島郡 島崎村、尼瀨町
- 刈羽郡 椎谷宮川間、荒濱村、柏崎

運輸交通の現況

越後地方に於ける運輸交通の現況は未だ山河と共に依然
 舊態古風を存し殆んど支那朝鮮の境域に足を投じたるの
 感想なき能はず就中交通上唯一の機關と稱する鐵道の設

け非ざるを以て孰れも不利不便の中に沈淪せり今既成官設鐵道の起點地たる中頸城郡直江津以北新潟に至る約四十里間内外即ち斯國第一の要路と稱する國縣道を通過し一度び其現況を目撃したらんには蓋し思ひ半に過るものあらん尤も信濃川沿岸に附近せる地方は稍々此流域に由りて航運回漕の便を有しつゝあるも其他は全く皆無にして人肩馬背に頼るの外一も貨物の運輸を爲すに由なし間々荷車等の便なきに非ざるも道路概ね險惡にして轉回意の如くならず加之其の一山を越へ一坂を跨ぐの價は瀛車數百里の運賃と其數を同ふす争でか彼此賣買品を輸するの用に適すべけんや此等は詰り自家の薪炭を輸し米麥を運ぶの用に供するに過ず歸する所は即ち人肩と馬背ある

のみ、元來越後地方は男子よりも女子の勞力に従ふもの割合に多く彼のバンドリと稱する一種の背負ひ具(藁を束ねて造り肩より脊に纏ふ者)を纏ひ米俵煉瓦石及菘包菰包の類を始め何にても目方十四五貫位のもものは容易く其脊上に載せ一條の押へ紐にて之を綁げ海岸に山路に三々伍々牛歩せるを見る間には中々剛強の者もあれど何にせよ人間の體力は大概程の知れたる者一人の脊中に二俵の米を載せて運ばしむるは到底出來ざる相談況んや嶮路峻坂の所々に横はりて行歩の障礙をなすに於てをや、左れば十俵の米を十里の市に出さんとし一里毎に之が繼替遞送を爲すとすれば都合九十人の肩頭を傭ひ一里一人拾錢の運賃とすれば僅々十俵の米に對し實に九圓といふ高運賃を拂

はざるべからず其の遂に商品とならざるは云ふまでもなく所謂寶らの持腐れとなり徒らに市上の好相場を耳にし米倉を睨んで年を送るもの越後地方其幾許なるや知るべかず余が本間氏に陪し柏崎を發して長岡に向ひたるは去る十一月廿七日而も風雨最と激しき日なりしも其れすら件のバンドリに米苞を背負ひ馬背に薪炭木材の類を積み東西南北に搬送するもの陸續として絶えず此の他商用の爲めに家事の爲めに草鞋を穿ち杖を曳きて來往するものは實に踵を接し袖を列らぬと謂ふも敢て過言にあらざるべし而して此等の行路者は或は二三里にして貨物の積替を爲し或は五六里にして一夜の宿泊を爲し以て僅に其用を辨ずるもの尙い之をいいて鐵道の便に依らじめんか其三

日を費すものは一日にして了り其半日を要するものは一二時間にして濟す事を得ん尤も天氣順良の日なりせば其の費用の如き時日の如き概ね豫算の數を以て達し得べしと雖も時に風雨の變に遭ひ洪水の害に會せんか其目算を失する實に甚しきものあらん現に此の日余等一行の長岡手前なる長生橋(信濃川に架したる一大橋にして此の時洪水の爲め其中部破損して渡る事能はず)に達したるは午後一時の交なりしが風濤激烈にして渡船を出す能はず止むなく橋側の茶店に憩ひ四時近くまで待合せしも更に靜穩に至らず殊に冬の日脚の最と短かき上陰雲四邊を閉したれば日暮常より早くして所々點燈の影を見る旅行者の心配實に一方ならず宮本村に引返して更に與板に向はんと

いふもあれば此の邊りの農家に舍りを求めて一夜を明さんといふもあり余等又途方にくれて空しく飛行器の備へなきを歎ずるのみ但し行手を急ぐ路にしあれば徒に此處に駐まる能はず仍て試に河邊の漁家を訪ひ船を出して余等一行に彼岸に達せしめん事を求めたりしに彼れ其賃錢の好きに涎を流し忽ち一隻の小舟を泛べ何の苦もなく波上に掉さして彼岸に達せしめたり蓋し其價を問へば曰く金壹圓七拾錢實に沙汰の限りと謂ふべきのみ夫れ平日壹錢の渡錢は一風一濤の變に由り一跳直ちに百六十九倍の高きに昇騰す尙ほ駄賃といひ車賃といひ將た人足賃といひ隨て其割合の暴騰するもの此一事を以て推知すべきなり然れども余等一行は幸に漁夫の好諾を得て此の日長岡

町に達するを得しも彼の長生橋畔の茶店に濡衣を絞りて雨師風伯の無情を歎じつゝありたる數十人の旅行者は遂に如何せしか余が夕飯を喫し枕に就くの交窓戸を叩く風の聲尙ほ強かりしより想へば或は一同川を踰ゆるに由なく所々に散逸して空しく一夜を心なき旅籠の中に明せしならん鐵道の便を有せざる地方人民の不便及旅行者の困難察すべきなり

其二

新潟市と長岡との間は信濃川の流れに小汽船を泛べ運輸交通の便に供す其の距離四十四海里五分の一にして右長岡町より午前六時即ち第一出船に乗込む時は與板、大河津、三條、加茂、小須戸、臼井、酒屋、大野等を経過し其日の正午若く

は午後一時頃までに新潟市に到着するを得べし尤も新潟
行は下流に従ふものなるを以て其船脚自然迅速なるも新
潟より長岡に向ふものは全く上流に溯るものなる故其船
脚甚だ遅緩にして時に或は下流船の速力に比し其半にだ
も及ばざるとありと故に上り船と下り船との賃金は常に
著しき差異あり今上等船客一人に就ての比較を記せんに
長岡より新潟まで 金五十七錢
新潟より長岡まで 金八十八錢
にして同一里程にありながら既に片道に付三十一錢の差
異あり尙し洪水後激流を溯るの日に當りては尙ほ之より
幾分の割合を増加すといふ其の謂れを問へば石炭の消費
高多量を要するが爲めなりと余が本間英一郎氏に陪して

新潟市を發し萬代橋下より例の小汽船に搭じ與板に向ひ
たるは舊臘十三日の正午時なりしが其船脚の遅緩なる實
に想像の外に出で僅に與板の河岸に着せしは其の日の午
下七時過ぎ堤上の漁家既に夕餉を喫了し圍爐裏に腹を暖
めて半睡を催すの交なりき偕此の船着場より與板の本町
までは尙相距ると十四五丁許り故に人は更に腕車を備ひ
貨物は新に荷車に載して其目的の旅舎に送らざるべから
ず此の賃金又一輛に付凡り十二三錢より十四五錢の間に
あり此他荷揚場と稱し右船着場の正面に店を張り旅客の
乗車、貨物の積卸等に奔走し其茶代に依りて生活を爲すも
のあり故に此所にも亦た十錢乃至十五錢の世話料を投ぜ
ざるべからず左れば七十二錢の船賃と右等の費用とを合

四十二

する時は遂に一圓以上の費用を要するに至る但し此等の不便は僻地の常として尙ほ忍ぶべきも之れより柏崎に向ふの途即ち十里に垂んたる山路峻坂の陸行は中々の困難、白雪は山野を填め堅氷は河川を閉じ乾坤皚々恰も玻璃鏡上に坐するの觀あり腕車は每一輛に附するに車夫二人、滿身の力を盡くして押せども曳けども車輪の半は常に積雪の中を没し進行一も意の如くならず漸く一時間内外にして十七八丁を進むに過ぎず殊に余の如き布袋的肥大の身軀を有する者は二人は愚か三人掛りにても他と同一に車を轉ばす能はずいつも前車に後るゝもの五六丁加之其の車の乗り替へ毎に重ひとか太ひとか二人では曳けぬから三人掛りにすべし杯苦情だら／＼容易に余が前には車を

四十三

廻さず結局籤引の上にて之を決し余に當りたるものを以て貧乏籤と謂ふ實に聞く度見る度痼癢に堪へざれども叱りたりとて怒りたりとて毫も益なき場合故に余は只管鐵道の便なきを歎じ將た其敷設の一日も速かならん事を祈りたり既にして亭午はいつか車中に過ぎ午下一時を過る頃僅に三里の路を辿り漸く三島郡宮本村に達するを得たり此間の車賃一輛に付九十錢即ち一里三十錢の割合に相當す宮本村より田代を経曾知村に向ふの途上曾知嶺の險あり殊に雪益々深きを以て此の間は逆も腕車の乗行は出來ざるなり仍て一同櫓に乗り替へ雨雪を冒して曾知の嶮路に就きたりしが其の絶頂に達せし頃は風雪最も激烈にして衣を吹く風は裂ん計りに強く、面を撲つ雪は傷かん許

りに痛く我れも人も此處の岩蔭、彼所の木の下に身を潜めて僅に其難を避け命からく曾知の家路に着したるは其の日の午下六時日全く暮れて道塗又た人影なし左りとて此處に舍りを求めべきにあらざれば更に車を備ひて柏崎に向ふ此の間左右廣濶田圃畦畔を辿るもの概ね三里半風益々強く雨彌々繁く車夫の笠は飛んで中天に上り車の母衣は裂けて幣帛の如し加之嵩さ高き荷物車の風に撲れて堤上堤下に轉覆するもの其幾回なるを知らず一同濕衣を絞り涕泗を潑りて柏崎なる岩戸屋が許に着したるは其夜の八時に稍々近き交なりき

其三

前日雨雪に打れて所々に薄氷を結べる濕衣を纏ひ路頭の

曉霜を踏で柏崎の旅舎を發したるは舊臘十五日午前八時の交なりし、此の日は彼の有名なる米山の嶮路を踰ゆるの難あるを以て孰れも朔風に健康を傷られざるの用心をさく怠りなく頭巾、襟卷、毛布杯に身を固め二人曳の腕車に揺られて登山の途に向ひたり實に天道は人を殺さず此の日は珍らしくも朝陽暉々として風も亦穩なりしが何にせよ鉢崎驛までは四里以上の路程而も其中の八九は山頂山腹に屬し一步を誤れば千仞の幽谷に墜落し身體塗粉其形影だに留めざるべく思はるゝ危道のみなれば車上の人には思はず冷汗を生じ車夫は自ら熱汗を流し共に渾身濕濡たり如何なる無情のものぞ雖も身一たび此の境に接せば自然愛憐の情を發し嶮路峻坂に會する毎に必ず車を下り

車夫を劬はるの心を生ぜん余は元來見かけよりも涙脆き男なり坦々たる東京の市街に於てすら少しく坂ある處に到れば必ず車を下りて車夫を勞はるを常とす故に此の如き險惡の山路に臨みては平然車上に座する能はず即ち坂を見ては下り崖に接しては歩み殆んど米山の半部は徒歩を以て越へたり彼の坂に車を押す如しとは難事を評する古人の言然るに今之を實地に見る余は其の車行の困難を感ずると共に現に其工を成さんとしつゝある直江津、柏崎間に於ける鐵道布設の片時も早く成を告げて此の困難を排除し斯く馬牛的勞役に服せる人民をして速に他業に轉ぜしめん事を思ふて止まざりき既にして車は遂に四里に餘る山路を軋りて鉢崎の驛路に達せり此の間の車賃は一

輛に付金一圓四十錢なり車夫の骨折もさるとなれど其價も亦た實に高直なりと云ふべし既に前にも記せし如く鉢崎、柏崎間は八個の隧道を潜りて其距離概ね七哩内外に過ぎず左れば他日汽車の運轉を見るに至らん乎下等にして金七錢中等にして十錢餘上等にして十五六錢にて通過するを得るのみならず又た其の時間を短縮するに於て利する所のもの尠少なからざるべし鉢崎、直江津間五里餘の間は土地平濶にして山路峻阪を辿るの難なしと雖も兎に角雪後の路にしあれば双輪終始泥濘に没し車行の難きは敢て前路に譲らず故に鉢崎、柿崎間及柿崎、潟町間も尙ほ二人曳を要し車賃は共に五十五錢を要求せられたり潟町より直江津までは道稍々宜しき爲め車賃又た隨て幾分を減じ即

ち一輛三十五錢を投じ其の日の午下七時頃幸うじて直江津の旅亭に着きぬ、之れにて越後三日間の難旅行は了りたり、今試みに此の間の費用を算するに前記船賃、車賃、旅籠料及茶代其他を合して金九圓三十錢餘を要せり、之れ固より些額の費用にして敢て其の廉不廉を問ふの要なしと雖も、只其の惜しむべきは汽車旅行の一日にだも足らざる路程に三日を費し雪に打れ風に櫛り半ば病軀の人となりて更に宿驛に其健康の舊に復するを待たざるべからざる時間の浪費これなり、尙ほ一步を進めて試に直江津、新潟間に於ける北越鐵道線路凡ち八十五哩間に汽車の運轉を見るの曉、之に依りて旅行する旅客の費用と現在の費用とを比較するに其差異實に左の如し、(但し一哩に對する下等賃金を

一錢と假定し中等、上等は尙其五割を増すものとす)

直江津、新潟間	下等	金八十五錢
同	中等	金一圓廿三錢
同	上等	金一圓八十三錢

右の如くなるを以て前記現在の陸行(即ち腕車行)の旅費九圓三十錢餘を要するものと相對比すれば即ち下等汽車賃八十五錢に對しては十倍餘、同中等に對しては七倍餘、同上等に對しては五倍餘の高きに居るを見る、されば直江津以東新潟に至る冬期間の旅は北越鐵道布設後にあらざれば殆ど出來得ざるものと云ふも強ち誣言にはあらざるべし、

郵便物遞送の現況

東京上野發午前六時の第一列車に搭じて輸送する郵便物は其の日の午後三時頃長野に着し尙ほ進んで其の夕刻までには直江津に達するを以て此の間百八十哩餘の鐵道線路に附近せる地方民は其の日の中に東京發の信書を手にし又東京の各新聞紙を閱するの便あるも直江津以北新潟に至る凡八十五哩の間は未だ鐵道の設け無を以て勢ひ人肩馬背に依らざれば他に之を發送するの便を有せず今其の實況の一端を記せんに信書、新聞紙等は古への如く飛脚の肩を勞し驛繼きを以て之を遞送し小包郵便の乃至荷嵩の郵便物は駄馬の脊に據りて之を遞送す故に右飛脚便に依て發送せらるゝものは途次三晝夜を経て始めて新潟市に達す例へば本月十五日東京を發したる信書、新聞は其の

途上の遞送に四日間(内一日は瀧車)を費し即ち同十八日の午後新潟郵便電信局に達し尙ほ之が配達に二三時間位は費すべければ其の全く受信人の手に領するは其の日の夜に屬するか又は翌朝に及ぶものあらん蓋し這は固より平穩無事の日を指したるもの、尙し風雨氷雪の其途を遮るものあらん乎或は一週目以上を費すが如き一大不便を生ずるに至らん、就中小包郵便物の如きは或は牛馬の背に托し或は婦女の脊を備ひ三里にしては繼替へ五里にしては卸し急がぬ旅と言はぬ計りの面持ちにて優々鞭を弄び又杖を操り例の追分節杯唸りつゝノタリノと歩行せる様の呑氣さ、之れでも一刻を争ふ郵便物の送達方かと思へば呆れて言句も出ざるなり此の有様より推考する時は其の宛

名人の手に落るの日は幾日の後にあるべきか思ひやるだに不憫なり但し這は皆な鐵道てふ運輸機關の設けなきに因するもの故に目下工事中なる北越鐵道其の工を竣り一度び業を開くに至らんか東京發の郵便物は其の日の午後八九時乃至十一二時頃までには新潟市に到達するの一大快便を啓くに至るべし

越後米の不遇

越の山越の海敢て好産地物なきにあらざるも其第一の産物として世に知られ人に信ぜられたるものを米穀とす即ち越後米といへば随分市上に名を博し相庭の上にも關係を有し其取引高の如き又た決して尠少に非ざる事は既に世人の知悉する所なり然るに斯く第一位に坐する良産物が

今日如何なる境遇に在るかを察するに毎年秋季八九月乃至十月の初めより翌年四五月の頃までは海は風濤に遮れて船を泛ぶる能はず道は氷雪に閉されて車を轉はず能はず運輸交通の道殆んど全く杜絶するを以て此の間京坂の市場は言ふに及ばず彼の高田長野の如き近隣の市場にさへ隨意之を輸して販賣を爲すに由なし故に此の期間に於て各市場如何なる好相庭を現出するも空しく雪を睨み海を望んで黙止するの外詮術あらざるなり由來越後全國より年々他に輸送する米穀の總高は凡そ一百万石にして此代價又た一千万圓内外に居る故に之が運轉融通を自在ならしめんか越後全國各種の民業上其の直接に間接に利益を興ふるもの蓋し尠少にあらざるべし今一千万圓に對す

る年利を五歩と見る時は一個年に五拾萬圓の利子を生じ
又た同八歩と見る時は八拾萬圓の利息を生ずるの割合に
して此の金額決して僅少のものに非ず然るは該一千萬圓
の價格を有する米穀は前記の如く毎年十月頃より翌年三
月末に至る凡う半年間は全く風雪の爲めに其運轉を遮
きられ農家の庫裏に將た商家の庫裏に空しく禁錮の身と
なりて些も人を益し世を利するの要を爲す能はず詰る所
越の人民は貯藏の米穀を隨時市に鬻ぎて利を取り便を得
る能はざるのみならず毎年六個月間は天然的交通遮斷
に遭逢し米價一千萬圓に對する廿五萬圓乃至四拾萬圓の
損失を喫しつゝあり蓋し其の損失は未だ之れのみ止ま
らず尙ほ他の一方を願れば更に之に加るの不利不便あり

并は他にあらざ輸入品賣買に關する割増代價を喫するも
のこれなり今其の一斑を舉んに假令ば東京大坂其他の地
方より常に輸入を仰ぐべき各舶來品を始め砂糖、食鹽、紙類
乃至竹材等の如きは孰れも冬季降雪の前に買入れ春季融
雪の日まで持續するの準備を施すものなれば是又六個月
乃至七個月間の金利を附するを例とす試みに冬春の交新
潟市若くば長岡三條等に到りて巻煙草、ハンカチーフ、杯現
に他より買入れたる物品を購ひ見よ其の東京に於て價三
拾錢と唱ふるものは五六拾錢を要し大坂にて五拾錢と唱
ふものは七八拾錢を投ぜされば之を得る能はず尤も通り
かゝりの旅客などは不時の事として左まで損益を感ぜざ
れども自己所有の産物は空しく庫中に埋没し毫も利用に

供する能はざるに一方に於ては斯る利附の高價品を購ひて衣食住の資に充る越後人民の不幸察すべきなり蓋し北越鐵道成るの曉に達せん乎此等の不利不便は又た立どころに消滅し農商工業の面目自然茲に改まり地方經濟の上に與ふる所の新利新益決して尠少にあらざるべし新潟縣民の幸福豈に嘉せざるべけんや

新潟市宿泊人の員數

新潟市街に於ける管内外宿泊人の員數は鐵道事業上大に關係を有するもの故に今左に其の概要を記して參省の一端に資す

自昨年一月至同六月新潟市宿泊人の數

旅人宿 管内男八萬二千四百九十四人、女五千五百六十二人

管外男一萬五千六百廿九人、女二千五十九人

下宿屋 管内男一萬五千三百三人、女百九人

管外男千六百九十八人、女十八人

木賃宿 管内男三千二百九十一人、女二百人

管外男五百七十四人、女百一十一人

合計十二萬六千八百四十八人内男十一萬八千七百八十九人、女八千〇五十九人

右六月以降は余が同市滞在中までは尙ほ其筋の調査未成中に在りしを以て之を詳知するの便を得ず但し同十一月中の届出數なりといふを見るに左の如し
旅人宿 管内男一萬四千六百五十一人、女九百三十一人、管

外男二千二百四十七人女三百五十五人外に外國人一人、下宿屋、管内男二千四百八十七人管外男二百七十五人女十五人木賃宿、管内男五百五十一人女三十三人管外男八十五人女十三人

蓋し右は其の時々營業者より届出たる員數のみ尙ほ下宿屋木賃宿等に於ける宿泊人の中には其届け洩れとなりたるものも亦た鮮なからざるべし故に此等届け洩れの宿泊人と及知己親戚の家に舍りたるもの杯を加へなば一箇月平均七八萬人の多きに達するならん(現在届出人員の一ヶ月平均は六萬三千四百二十四人に當る)尙ほ此他長岡、三條、與板及柏崎等の旅舎に泊するものも多かるべければ北越鐵道成るの曉新發田直江津間百二哩に對する平均一日の

通し旅客數一千人内外を得るは蓋し難きにあらざるべし今試みに上中下等の汽車賃を平均して一哩三錢と假定し同鐵道總哩數百二哩と一千人の乗客とに對し毎一日の總賃金を算する時は實に三千六十圓尙ほ之に貨物の運賃若干を加ふる時は遂に四千五百餘圓の收入を見るに至るべし洵に前途多望の好鐵道只其の一日も速に工を竣り上述の不利不便を排して實利實効を奏せん事國家の爲めに地方の爲めに轉た冀望に堪へざる所なり

明治三十年二月廿五日發行

明治三十年二月二日印刷

(非賣品)

著述兼
發行者

甲 秀 輔

東京市麴町區內幸町一丁目五番地

印刷者

星 野 諤 治 郎

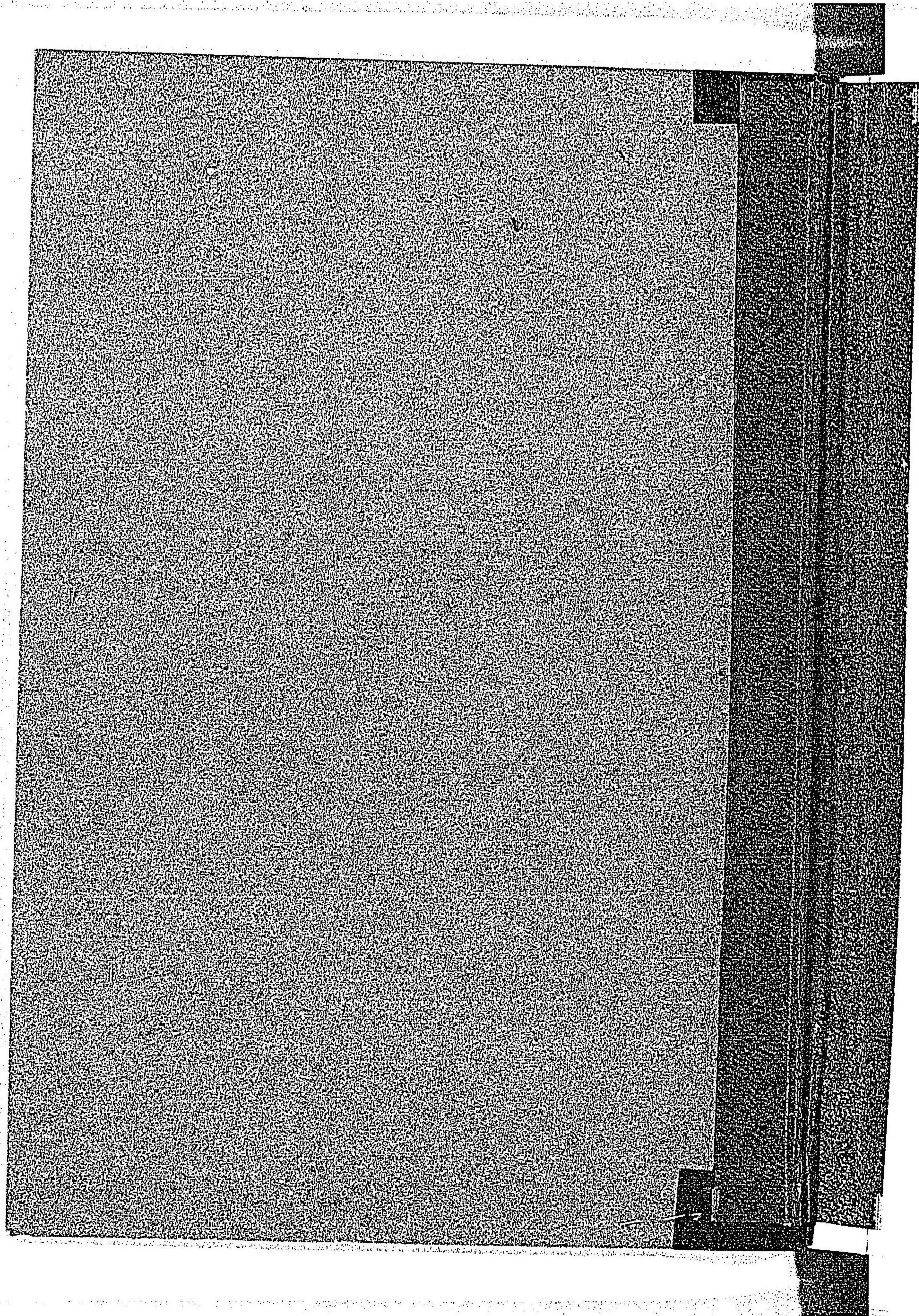
東京市日本橋區兜町貳番地
東京印刷株式會社

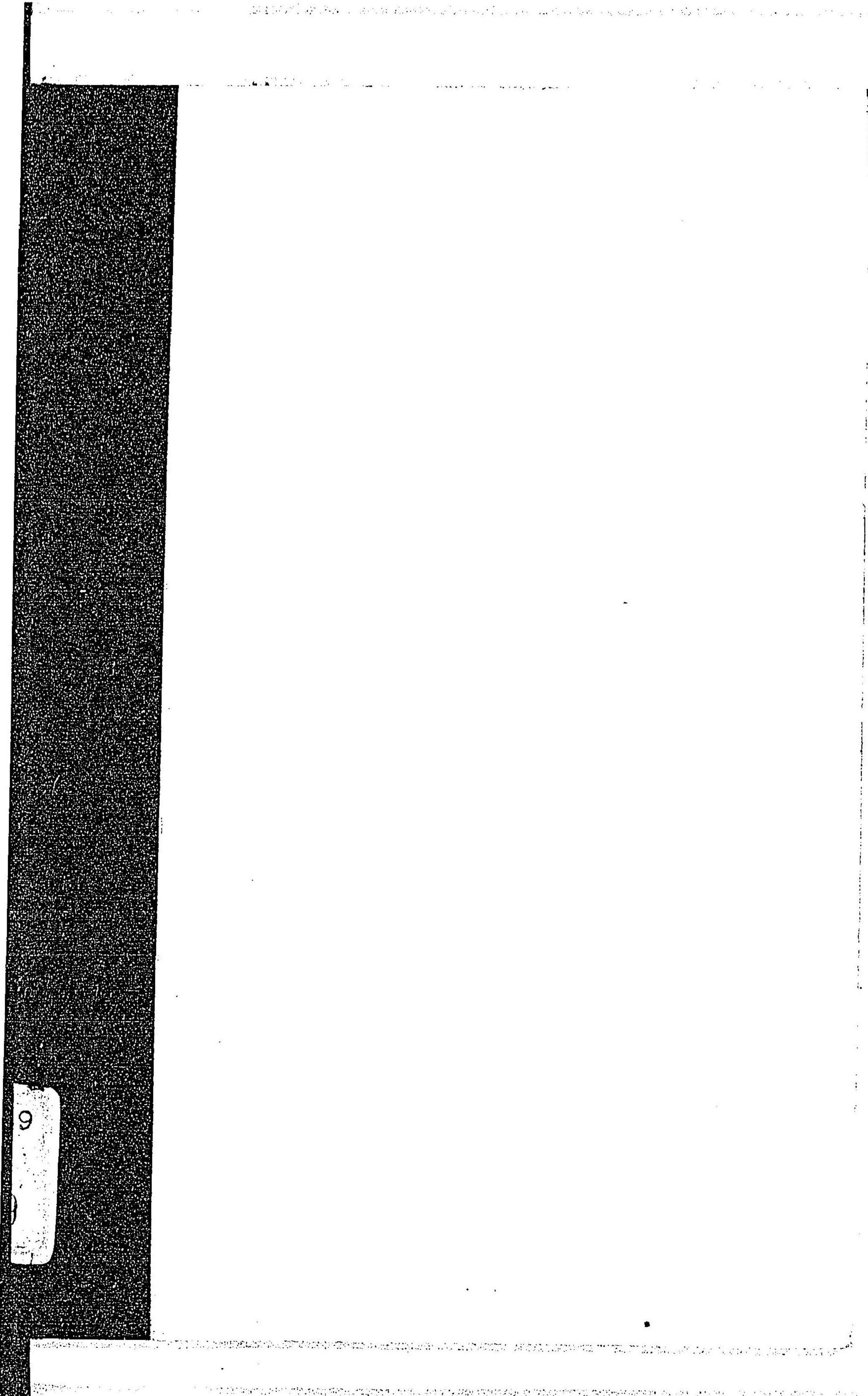
印刷所

東京印刷株式會社

東京市日本橋區兜町貳番地

A-60





9

北越鐵道工事實見

甲 秀輔

国立国会図書館

066957-000-4

特49-179

北越鐵道工事實見

甲 秀輔/著

M30.2

CDF-0109



